

## 書評：『日中対話の新たな可能性をめざして—歴史・記憶との共生—』 佐藤幸男・森川裕二編著（富山大学 CEAKS 研究叢書「交響するアジア」第4巻、2013年）

中山 賢 司（創価大学）

### はじめに

本書は、富山大学が2010年度から3カ年の教育研究プロジェクトとして取り組んだ文科省特別経費事業『東アジア「共生」学創成の学際的融合研究』（Creation of East Asian 'Kyosei' Studies = CEAKS）の集大成の一つである。研究代表を務めた佐藤幸男氏（富山大学名誉教授、北東アジア学会理事）によれば、同プロジェクトの目的は、「時代が大きく変わろうとしているこんにちの世界を眺みながら、21世紀の来たるべき世界のあり方を『アジア』と『共生』という二つのキーワードをもとに、新たな社会を創成するための学知の体系化」を目指すものであったという（p. 4）。したがって、おのずとその研究領域は幅広く、①人間の安全保障（社会福祉・社会的弱者・医療）、②「共生経済」を模索する地域統合ダイナミズム、③公害・安全・環境、④歴史認識・教育——と多岐に渡る。

同プロジェクトでとりわけ特筆すべき点を挙げれば、学内の共同研究者のほか、中国・韓国など海外からの研究協力者を含め総勢70名（p. 4）が参画していたことにあるだろう。富山という、日本海側のいちローカルから出発した新たな「知的実験の〈場〉」（p. 202）が、国境を越えて拡がり大きく展開したことは刮目せざるを得ない。2014年2月現在、同プロジェクトは、「グローバル共生社会形成のための地域立脚型拠点」へと引き継がれ、フェーズⅡがスタートしている<sup>1</sup>。

### 1. 目的・構成

本書は、CEAKS 研究叢書「交響するアジア」シリーズの第4巻として、「歴史認識・教育」領域での日中研究者間の対話の記録として編纂された。具体的には、歴史（中国近現代史）、政治（思想、外交、国際関係）を専門とする日中研究者が2012年2月、中国社会科学院近代史研究所に参集し「第1回日中合同ワークショップ：東アジア共生—その歴史認識の共有をめぐる—」での発表を基に執筆した論考が収められている。「共生」学の創成という CEAKS 全体の問題意識と実践記録が最も鮮明に描かれた一書といえるだろう。

本書は、第Ⅰ部「歴史・記憶との共生をめざして」、第Ⅱ部「資料編」の二部構成となっている（総頁数：203頁）。第Ⅰ部には、佐藤幸男 CEAKS 代表（序章）ほか、中国社会科学院近代史研究所から歩平所長（第2章）、李長焜（第3章）、金以林（第4章）、徐秀麗（第5章）、畢苑（第7章）研究員が寄稿し、岩波書店の馬場公彦（第6章）、華東師範大学の徐顕芬（第8章）、CEAKS 事務局の森川裕二（現・長崎大学）（第9章）が加わる。

第Ⅰ部各章をその主題から大別すれば、1) 研究プロジェクト全体を総括した序章、2) 歴史認識問題と「共生」の課題を探求した第2～5章、3) 特定の 이슈に焦点を当てて「共生」課題を考察した第6～9章の三つに整理できる。

以下、各章の概要を紹介するが、まずは

CEAKS 全体の主題に関わる論点整理を行った序章、佐藤幸男「21世紀の『人権としての平和』構築と共生学序説」を取り上げよう。佐藤氏は、「共生」と「東アジア」という二つの言説をめぐって氏が広範に蒐集した文献を駆使して、「共生」学創成の課題と鳥瞰的展望を示している。佐藤氏の主たる視点は、「西欧の眼」を通じた鏡像としての「アジア」から脱皮した「共生」学の創成にある（p. 32）。氏が構想する「共生」とは、国家主体に偏重した国際理論への批判的な視座から「多重主体な自己と世界を構築する未来への思想」（p. 33）として描かれる。こうした「共生」課題の実践目標として、大学間の協力による新たなアジア人育成、教育・社会制度における「人権としての平和」構築などを掲げ総括している。

## 2. 国境を越える歴史認識と「共生」

第2～5章は、東アジア「共生」の主要課題である歴史認識問題にフォーカスした論考群である。

第2章、歩平「国境を越える歴史認識と東アジアの『共生』」は、「東アジアの『共生』が直面する主要な課題は、真の東アジアの同一性を打ち立てられるかどうかである」（p. 36）との問題意識に立ち、歴史問題がもたらした障害を解決する必要から、「国境を越えた歴史認識」の樹立を構想する。歩平氏は、日中両国が2006年12月にスタートさせた「日中共同歴史研究」（～2010年）で中国側座長を務めた人物である。同氏は、共同研究の成果を、「異なる国家間の歴史学者が深く掘り下げた交流を行うという新しい局面を切り開いた」、「民衆の間で国境を越えた歴史認識の樹立を行うための見本を提供した」、「政治面からの位置決め、中日関係に影響した歴史問題のために、重要な学術的根拠を提供した」と評し（pp. 49-51）、重要な一歩と位置づける。一方で、侵略戦争の責任や歴史事実を歪曲化する学術問題の「政治化」を懸念すると同時に、学術・民衆・政治す

べての領域において「国境を越える歴史認識」を樹立することが東アジア「共生」の基礎的要件になると主張する。

第3章、李長莉「『東アジア共生』と『東アジア学』」では、「東アジア共生」という国際秩序理念を確立するために、「相互了解、理解、信頼、コンセンサス」という一連の知識体系「東アジア学」理念の構築が提唱される（p. 62）。李氏によれば、「東アジア学」とは、「東アジア全体の立場と視点から、東アジア各国の歴史と文化の関連を考察し、東アジア各国の共生の道を探求する知識体系」（p. 62）であるという。その意味で、近年、「東アジア歴史教科書の共同編纂」、「共同歴史研究」、「一国の研究者が編纂した東アジア全史」、「各国歴史書の紹介」（pp. 63-67）などで一定の進展がみられたことに期待を寄せる。

第4章、金以林「共同歴史研究における民族感情と歴史記述」は、日中共同歴史研究の事務局を務めた経験をもとに、共通の歴史認識を確立するための実現可能性を説く。「事実を尊重するということを基本に、互いに許しあい、譲り合い、事実に根拠を求め、真に国境を越えた歴史認識を確立し、東アジアに共通の歴史観を打ち立てることができる」（p. 77）という期待を隠さない。

第5章、徐秀麗「歴史認識と東アジアの『共生』」では、共同歴史研究を通じ国家間の和解を促した先例として、ドイツ・フランス、ドイツ・ポーランドにおける共同研究や教科書の共同編纂を取り上げていくつかの特徴を抽出する。「政府は、相対的に超越した立場をとった」、「歴史の共通認識は参加した学者から学界に広まり、一般の人々に浸透していった」、「最も大きな争点を取り上げて討論し、差異や相違の存在を認める」、「多面的な二国間関係」（pp. 87-91）などの特徴が東アジアへの教訓を示唆しているという。徐氏によれば、「人類社会の共生が自然界と明らかに違うのは、『相利共生』の存在だけが認められ、『片利共生』や『片害共生』などは持続することができ

ない」ことであるという。そして「相利共生を実現するために、双方が重要な問題で共通の認識をもつことが必要」とし、共通の歴史認識を醸成するための共同研究が重要な意義と役割を担うことを強調した。

### 3. 特定イシューと「共生」

第6～9章では、歴史認識問題を念頭に、特定のイシュー（日本人の中国像、教育、ODA、「協生」）にフォーカスして「共生」課題を探求している。

第6章、馬場公彦「同時代史としての日中関係」は、「なぜ日本と中国の間で、歴史問題が問題として意識化されるのか」（p. 95）という問いに対し、中華人民共和国建国にまで時間軸を遡って、「日本人の対中認識のパターン＝認識経路」（p. 99）から接近を試みる。馬場氏の主張は、総計24種の総合雑誌に掲載された中国関連記事2,554本の言説分析（『戦後日本人の中国像』新曜社、2010年）を踏まえた論だけに説得力を持つ。同氏によれば、日本人の対中認識は、これまでの「中国革命を日本の問題として内在的に捉える同時代認識」、いわば「辛亥革命以来の『革命中国』像」はすでに失われており、外から客観的に観察する対象に変貌を遂げたという（p. 111）。言い換えれば、中国は、「日本の変革への願望を投影し、日本の将来構想を投企する『内なる中国』から、単なる客観的観察・分析対象としての『外なる中国』へと変わった」という（p. 111）。「富強中国とつきあうという、近代史上未曾有の事態に直面」した現在、「日中の相互認識という視点から、戦後の同時代体験を通して蓄積されてきた相互理解の過程を回顧」し、「歴史的教訓を汲み取る作業に着手」することの有意性を説く（p. 112-113）。

第7章、畢苑「文化・教育の変革とナショナル・アイデンティティ」は、佐藤氏が序章で実践目標として掲げた「教育」にフォーカスした論考であ

る。中国近代のナショナル・アイデンティティ形成における教育の役割を考察課題とし、清朝末・民国初期の教育改革の成果を、文化・制度両面から検討している。畢氏によれば、「文化・教育の変革と国家の政治変革とは互いに促進しあい、新しい文化理念と新しい政治制度の知識を普及する」（p. 123）。こうしたプロセスの中で中国の新しいナショナル・アイデンティティが形成されていくという。

第8章、徐顕芬「歴史問題とODA」では、「ODAの供与が『歴史の和解』に資するか」（p. 125）という問いに対し、1979年からのおよそ30年間にわたって日本が実施した対中ODAと歴史認識問題の推移を、一次資料を駆使しながら時系列で追跡している。徐氏によれば、日中間には、「歴史、ODAをめぐる二重の感謝論が存在」し、それが同時に、「二重の『すべき論』」につながっているという（p. 136）。両者の感情は反発の連鎖でますますねじれていき、その結果、「ODAの供与は相手国の友好感情をある程度醸成することができるが、歴史和解の実現を、ODAの供与に託すことは、過剰な期待であると言わざるを得ないだろう」（p. 137）と総括する。

第9章、森川裕二「アジア地域形成と共生の時間軸」では、「グローバル市場と統合する形で誕生した<経済アジア>」（pp. 139）の延長線に、果たしてアジア独自の秩序が登場し、それが普遍的な論理となりうるのか、という問いが発せられる。森川氏は、冷戦終結直後に浮上した環日本海サブリージョナリズムに思想的な視座を提供した渋谷武氏（新潟大学名誉教授、北東アジア学会初代会長・名誉会員）の「協生」理論に着目し、同理論をアジア独自の秩序（時空）として捉え、「他者否定の論理を排除した『真の共生』」（p. 150）と位置づける。しかしながら、渋谷の「協生」理論は1990年代後半以降、アジア研究の中心から後退を余儀なくされる。同氏によれば、「<脱亜>ネットワークによる包摂」、「日

本側の国土形成の未成熟」、「歴史的モーメンタムの停滞」などがその背景にあるという。かくして、「環日本海リージョナリズムが地域主義なき＜脱亜＞した＜経済アジア＞ネットワークに包摂されていく時空の歩みは、真の『共生』（協生）を目指す新たな地域形成ではなく、機能的協力関係による地域統合に過度に期待したものであった」（p. 150）と結論づける。

## おわりに

このように見てくると本書は、CEAKS プロジェクトの問題意識と視角が見事に盛り込まれた論考集といってよいだろう。とりわけ本書のもつ最大の功績は、東アジアの「共生」課題として歴史認識問題を取り上げ、日中研究者間の＜知的実験の場＞を探求する「実践を伴った学術的試み」<sup>2</sup>として編纂された点にある。これまでに日中研究者間の対話の試みが無かったわけではない<sup>3</sup>。しかし、「日中共同歴史研究」の中心にいた中国社会科学院近代史研究所の研究者が加わった本書の意義はいやまして大きい。加えて、冒頭でも触れたように、富山という、日本海側のローカル次元から「国境を越えた歴史認識」の試みが出発したことの意義は大きい。冷戦終焉後の国際社会は、森川氏も指摘するように、「国内のローカル次元そして国境を越えた多様な地域の各次元が連繋し新たなガバナンスの予兆」（p. 139）が確認できる。いちローカルから出発した CEAKS の試みは、本学会が志向するローカル次元に根ざした地域平和の理念とも共鳴すると同時に、新しい国際社会単位に新たな価値を注ぎ込もうとする極めて意欲的な社会実験であったとも解釈できよう。

しかし、だからこそ、本書の中に、質疑応答部分など研究者同士の対話・討議がビビッドに伝わる内実を含めてほしかった。言い換えれば、どのようなプロセスを経て、歩平氏がいう「学術研究」領域で

の「国境を越える歴史認識」が探求されたのか。李長莉氏の表現を借りれば、「相互了解、理解、信頼、コンセンサス」という一連の知識体系にどの程度の進展ないしはズレがみられたのか。

佐藤代表が掲げた、「西欧の眼」を通じた鏡像としての「アジア」から脱皮した「共生」学の創成という視点は、各章執筆者に一定の共通了解が窺える。だが一方で、「多重主体な自己と世界を構築する未来への思想」（p. 33）として佐藤氏が構想した「共生」理念の探求は途に就いたばかりでもある。

歩平氏が、日中歴史問題を、「政治判断」「民衆感情」「学術研究」の各次元に切り分けあたかもベン図のような相互関係として捉えてみせたのは明晰である。徐秀麗氏が、欧州の先例から導き出した東アジアへのいくつかの教訓も有益である。畢苑氏が、教育の機能から抽出した、「自身を変え、さらに進んで世界を変える」（p. 123）という理念も示唆に富む。さらに森川氏が、本学会の先達である渋谷武氏の「協生」理論を取り上げ、「自己中心的に他者を選別する『共生』（p. 145）と対比させ、他者否定の論理を排除した「協生」を「真の共生」（p. 150）として位置づけたのは達観である。

本書にみた＜知的実験の場＞を探求する試みは、佐藤氏も指摘するように、「静かではあるが少しずつ漸進」（p. 202）する息の長い取り組みである。既存の価値観の再考と新たな方法論の確立という同プロジェクトが提示した長期的課題は、北東アジア研究に取り組むわれわれ一人ひとりの「学術的自覚と責任感」（p. 68）にも委ねられた問題であるといえよう。

- 1 CEAKS II ホームページを参照。<<http://www3.u-toyama.ac.jp/cfes/ceaks2/index.html>> (2014年1月28日取得)。
- 2 多賀秀敏(早稲田大学教授、北東アジア学会名誉会員)はCEAKSのプロジェクトを「平和の内実として、共生と連帯とを国境を越えて地域規模で実現しようとする実践を伴った学術的試み」と評し、期待を寄せた。多賀秀敏「巻頭言」(多賀秀敏・中山賢司編『早稲田平和学研究』第6号、2013年)。
- 3 例えば、劉傑・三谷博、楊大慶編『国境を越える歴史認識—日中対話の試み』(東京大学出版会、2006年)がある。